◇極め人に聴く◇47

万邦共栄の楽しみをともにする

元海上自衛官
自衛隊初の特殊部隊「特別警備隊」創設者
伊藤（いとう）　祐靖（すけやす）

伊藤　祐靖 氏

聞き手
室舘（むろだて）　勲（いさお）
（株式会社 潮流社 代表取締役社長）

「何のために？」

――伊藤祐靖さんは、海上自衛隊にてイージス艦「みょうこう」の航海長を務められていた時に発生した１９９９年「能登半島沖不審船事件」を契機に、海上自衛隊の特殊部隊「特別警備隊」の創設に関わりました。２００７年に自衛官を退官されてからは拠点を海外に移し、各国の警察、軍隊などで訓練指導をされています。お生まれはどちらですか。

伊藤　父の実家である東京で生まれました。拙著でも語っておりますが、やはり父が私の人生に与えた影響は大きかったと思っています。父は、陸軍中野学校在校中に、蔣介石の暗殺命令を受けていた男です。父は「何のために、何をするのか？」を常に気にしていたと思います。その影響だと思いますが私も目的や理由を明確にしないまま行動することに強い抵抗を感じ、いまでも常に「なぜ？」「何のために？」ということにこだわっています。

　高校では陸上競技をやりましたが、そのときの監督も同じ考えの方で「この世に根性という言葉はない。あるのは欲求だけだ。その欲求がどれだけ強いかの問題なんだ。科学的で合理的なトレーニング方法を追求し、他人が真似できない量をこなしたものが最後に勝つ。それを支えるのが情熱、つまり欲求なんだ」という教えでした。「うさぎ跳びをたくさんすれば甲子園に行ける」という話ではなく、科学的、論理的な根拠が背景にあるべき、という点で大切な考え方だと思います。

――論理的な根拠ですか。

伊藤　特殊部隊の創設時には、今まで防衛省が調達したことのないものを財務省へ予算要求をするわけですが、財務省は重箱の隅をつつくように予算の必要性を追求してきます。ですから、多くの職員は予算説明を嫌がります。私としては、すべて論理的根拠を持って必要な装備品をあげているわけですから、説明は非常に簡単です。

「この部隊は能登半島沖不審船事件をきっかけに作られる特殊部隊ですので少なくとも、仮に同じ事件が発生したときにはさらっと解決できなければなりません。これが、同じ事件が発生した場合の作戦計画です。この作戦を実行するためには、この装備品とこういったことができる隊員が必要であり、さらにこの訓練を実施できる環境が必要です」と、根拠を説明すると、誰もが納得してくれました。逆に、筋が通った反論があるなら、計画をブラッシュアップできるのでありがたい話です。財務省職員もプロですから、ごまかしは効かないけれども、そもそもごまかす必要なんてありません。

――根拠がしっかりしていれば説明ができる。

伊藤　基本的に、物事は根本がしっかりしていれば論理的に説明できないことなんてあるはずがない。

ただ、逆説的ですが、私が所属していた「自衛隊」という組織の存在は、私の中では、いまだに説明がつきません。自衛隊員であった私が憲法９条を読んでも「自衛隊は違憲だな」と思いました。「陸海空軍その他の戦力は、これを保持しない」（日本国憲法９条　一部抜粋）とあります。戦闘機があって、潜水艦を持っていて、特殊部隊まである。「でも、これは軍ではではないし、戦力でもありません」というロジックは苦しいですよ。

本来自衛隊の拠り所であるべき憲法で、自分たちの存在を否定しているのですから厳しいです。特殊部隊を作ったときにも、いざ出撃命令が来て、もし隊員から「我々は何のために行かなければならないのですか」と問われたら、私は明確に答えられないです。当然、私の考えや気持ちを伝えることはできますが、憲法に「戦力を保持しない」と書いてありますから法的根拠をもとにした論理的な説明ができないのです。当事者である私がそうなのですから、政治家の方々の論理に無理が出てきてしまうのも当然かなと思います。

――現状に合わせた憲法改正がされるべきということでしょうか。

伊藤　問題は、憲法改正の理由です。憲法改正の是非が議論される中で、改憲派にもいろんな意見がありますよね。たとえば「占領中に作られたもので国際法違反だ」「ＧＨＱが３週間で作ったものだ」「英語で作られたから日本語訳が支離滅裂だ」などです。私にしてみれば、それが本当に憲法改正の理由なのだろうか？と。逆に、日本人の手で作られて、長い期間をかけて成立した、正しい日本語の日本国憲法であれば、改正しなくて良いのでしょうか？

そうではないと思っています。憲法改正の理由は、「日本の国家理念と食い違っているから」以外にあるんですか？　あり得ないでしょう。憲法とは国内の法律やルールの根っこですから、国が目指しているもの、つまり日本の国家理念と食い違っているから、以外の理由であれば、修正という程度のものになるはずです。

私が政治や国家運営に携わる方にご提案したいのは（憲法ももちろん変えてほしいですが）まずは国家理念を決めませんか？ということです。これを明らかにしない限り、憲法改正の議論すらできないのではな

いでしょうか。多少フワッとしていても良いから「国としてここを目指すんだ」を決めない限り、憲法改正の理由に説得力が生まれません。

2つの勅語

伊藤　あるとき、戦前はどうだったと父に尋ねたことがあります。戦前に国家理念はあったのかと聞くと、父は「あったに決まってるだろ。戦（いくさ）をしてるんだぞ」と。そして、それが何であったのかと聞くと父は「『開戦の詔』と『終戦の詔』を読め、そこにすべて書いてある」としか言いませんでした。「開戦の詔」とは1941年大東亜戦争の開戦時のものですし、「終戦の詔」とは終戦時に玉音放送でも流れたものです。これらを50回以上読みましたが、国家理念についてのくだりはありません。ところがあるとき、両方の詔勅に共通している文言があることに気付きました。それは「万邦共栄の楽しみをともにする」です。要するに「世界の国々とともに栄えその喜びを共有する」これが、国家の舵取りをする重大な局面で明言されている。これこそが日本が目指している国家理念なんだと思いました。

――「万邦共栄の楽しみをともにする」。

伊藤　アメリカは、国家理念や建国の理念が「自由」という言葉で表現されています。いろんな出来事や決断も「フリーダムのため」で説明がつきます。ヨーロッパから自由を求めてこの地に降り立ち、世界中から集まってきた移民の国である、我々はフリーダムであるべきなんだ、と。根本となる理念があるから説明がつく。しかし日本にはそれがありません。

会社組織に言い換えると、企業理念や創業の精神です。何のために会社を作ったのかという理念があって、同じ考えの人たちが集まって組織になり、社長や従業員は理念の実現に向けて努力する。組織のさらに大きな単位が国です。理念とは、美学とか人生観に近いものだと思いますし、それが主権だと思うんですね。国民の皆が目指しているものが主権であり、これを守るためなら自分の命を犠牲にしてもいいと言う人がいる。この国の主権を守るために、汗を流しても、納税しても良いと言う人たちが集まる。誰もが簡単に出身国や国籍を選べるわけではないですが、国民の皆が目指している共通のものを主権とすれば、納得がいきます。

――アメリカという比較的新しい国と、日本という建国から長い国という見方もできますね。企業でも、創業から3年や5年なら目的も明確で、社員のモチベーションも高い。大企業みたいに50年、100年と経つと目的も薄まっていき、理念への共感よりも福利厚生にばかり目が行くようになるのかなと。日本も長い時間軸の中で、そして敗戦、占領を経て、薄まってしまっている何かがあるのかなと思いますね。

伊藤　そうかも知れません。「日本人は愛国

心がない」とも言われますが、国が求めている理念を明確に掲げ、国民はその理念に向かっていくことが好きなのかそうじゃないのか。好きならお互いウェルカムですし、好きじゃないなら他の国に行くか、我慢して生きていくかです。こうした考え方が教育の根本にあるべきではないのかと思います。歴史の授業で、年号を伝えるよりも大事なことは、我々の先輩や先人たちは一体、日本の何を守ってきたのか、何のために命を使ったのかを明確に伝えることです。それを知ることが日本国民としての大前提だと思います。

――企業にも同じことが言えますね。

伊藤　就職の面接でよく聞かれるのは志望理由ですよね。そこで企業理念が出ず「家から近いから」というのはお門違いでしょう。「御社が目指しているものを私もやりたいんです」そういう人の集まり。もちろん理想論とは思いますが、だからこそ、日本の国家理念を教えることが、日本の教育の最初にあるべきなんじゃないかと思うのです。

当然日本は、アメリカとも中国ともイギリスとも違う、日本の国家理念があるはずです。私は「万邦共栄の楽しみをともにする」だと思っていて、これに私は大いに共感していて、それを目指すために命を使いたいと思っています。

「国益」という言葉も自国第一主義で、他国のことを蔑ろにしていると感じるのであまり好きではないです。自国のことだけを考えればマイナスであっても、国として目指していることのためなら行動すべきだというのは、あり得る話だと思います。

国の主権を守る

――国を守る。でも世界にも貢献する、ということでしょうか。

伊藤　あくまで守るべきは日本の主権です。国家が目指している「万邦共栄の楽しみを共にする」という理念があったとしたら、この主権を守る。主権を守るために、戦うのか、議論で治めるのか。これを常に考えるべきです。逆に、戦うのは何のためかというと国家理念、日本の主権を守るため以外であってはいけないはずです。国民としてこうした根っこがあるなら、それが守る理由にも戦う理由にもなるのです。

――「万邦共栄の楽しみをともにする」、大切な言葉ですね。伊藤さんが今後やりたいことはありますか。

伊藤　自衛官として不審船に対峙した経験と特殊部隊を創設した経験、自衛隊という組織を出た私の考え。こういった、私の知っていることや経験してきたことを話し、議論のきっかけにしてほしいです。「これが正しい」とか「こうするべき」ということではなく、私の考えをお話しして、議論のきっかけにしていただければと思い、話をする機会があればいろんな場所で話しています。

――最後に、次世代の若者に向けてメッセージをお願いいたします。

伊藤　何をするにも「何のため？」を大事にしてほしいです。

特殊部隊の主任教官として、訓練初日の学生に「今日、朝飯食べたか？」「はい、

食べました」「なんで食べたんだ?」と聞くと大抵は固まります。「お腹が空いていたので」「食堂が○時までなので」などと言う。

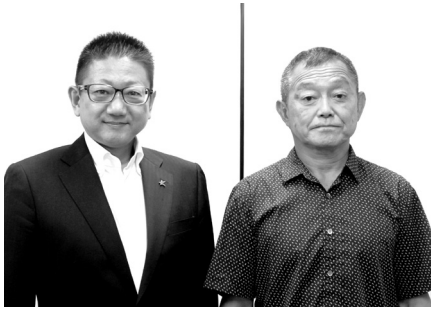
「違うだろう。君は今日、特殊部隊員になるための訓練を受けに来ている。当然、カロリー、タンパク質、ビタミン、すべて必要。それらを摂取するために朝食を食べたんだ。お前の空腹を満たすためではない。身体は自分のものじゃない。この国のためにある。国から預かっているものだ。それを常に磨いて、いつでも使えるようにしておくために今日一日を行動し、生きるんだ。勘違いするな」と諭します。ここで心に火がつけば、特殊部隊員の素質があります。逆に、冗談じゃない、この体は俺のものだ、と思う人は「何のために?」が噛み合わないのですからやめたほうがいいわけです。

働くことも同じことです。若い人への言葉としては「どうして俺は目覚まし時計をかけるんだろう?」と考えてほしいです。

「明日遅刻すると怒られるから」「課長が怖いから」とかではなく、「俺は明日出勤するんだ。なぜ出勤するかというと、そもそも自分のやりたいことと会社の企業理念とが一致しているから、俺は入社した。つまり明日、会社で俺はやりたいことをする。そのために俺は生まれて来たんだ」と思って目覚まし時計をかけて、朝起きて出勤すると、やはり違いますよね。「あーあ眠てぇな」と思っている人とは違う。毎晩、目覚まし時計をかけるたびに「なんで俺は目覚ましをかけるか」を自分を主語にして答えられれば、たぶん全然違う人生になると思います。

――目的意識が噛み合っている人は、朝の目覚めから変わりますね。

伊藤　甲子園に行きたいと思っている人は、野球の練習をするのは楽しいはずです。野球が嫌いで料理が好きな人に野球をやれと言ったら、これは苦ですよね。もし甲子園に行きたいなら、雨の中でも野球をやりたいものです。



自分の人生ですから、行動の一つ一つの「何のために?」を自分を主語にして考えられる人間になってほしいと思います。

――本日はありがとうございました。

■いとう・すけやす■
1964年　東京都生まれ
日本体育大学卒業後、海上自衛隊入隊。
防大指導官、「たちかぜ」砲術長等を歴任。
イージス艦「みょうこう」航海長時に遭遇した能登半島沖不審船事案を契機に、自衛隊初の特殊部隊である「特別警備隊」の創設に関わり、創隊以降6年間先任小隊長を務める。
2007年に中途退職後、拠点を海外に移し、各国の警察、軍隊などで訓練指導を行う。
著書に『国のために死ねるか』『自衛隊失格』『邦人奪還』などがある。

カレント年間購読はコチラ⇩